

癒しが生む文学のまち 和倉温泉

開湯1200年

今年、開湯1200年を迎えた和倉温泉。現在、国内外から訪れる、年間100万人を超える浴客で賑わっている。

しかし、この温泉街もかつては、

涌浦涌浦と家なら七つ

鳴に湯がでにや誰行こや

とさびしい

まちの様子を詠われていたことがあった。和倉温泉の、ほぼ中央部に位置する、弁天崎公園にある「涌浦開発七士賛美之碑」に、この歌が記されている。



弁天崎公園

弁天崎公園は、もとは小さな島であったものが和倉温泉の開発によって埋立てられ、地続きになったものである。

園内を散策すると、かつて波にさらされて削られたのであろう岩の姿に、島だった頃の面影が残っている。

公園の中心は、和倉温泉の

守り神ともいわれる、和倉弁天社で、朱色の柱が目にとまる。また、薬師如来堂や湯呑場、いくつもの石碑が建っている。



この記念碑の中には、和倉温泉が全国にその名を博していることを示す、著名な文人の訪れた足跡として、詩歌の刻まれたものがある。

高浜 虚子

そのひとつ、御影石で造られた句碑には、

家持の 妻恋舟か

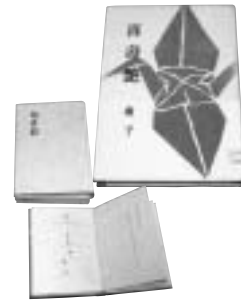
春の海

虚子

と刻まれている。この句は、昭和24年4月、能登各地を来遊した高浜虚子が、和倉に宿

泊した翌日（26日）、旅館で行なわれた句会で披露した五句のなかの一つである。虚子の『喜寿艶』（創元社刊）に、この句についての記述が載っている。

中島図書館内
大森積翠文庫



そこには、万葉歌人大伴家持が越中国国司であった時代（746〜751年）に妻を恋しがって詠んだとされる歌

妹に逢はず

久しくなりぬ

饒石川

清き瀬ごとに

水占はへてな

万葉集巻17（4028）

とともに、「能登七尾湾のほとりにたたずむと、能登島を控えた物淋しい湾の中に、ただ1隻の船が浮かんでいるのが目にとまった」と書かれ

ている。

七尾湾のほとりとは、旅館の近くの海辺であろうか。当時75歳の虚子には、春の穏やかな海に浮かぶ1隻の船に、若き家持が京の妻を想いながら船路を進む情景が浮かんだのであろう。

和倉温泉での宿泊で、心身ともに和んだ翌朝に見る、鏡のように穏やかな春の海と新緑の能登島。この景色が、ホトトギス派の主宰として俳壇の最高峰と敬われていた虚子が秀句として自選の『虚子百句』に収めたこの句を詠ませたのであろう。

句碑は、この年の8月に造られた。碑文は虚子の揮毫である。

この句を眺めていると、家持の詠んだ

香島より

熊来を指して

漕ぐ舟の

楫取る間なく

都し思ほゆ

万葉集巻17（4028）

の歌を思い出す。

佐佐木

信綱

弁天崎公園には、もう一つ

家持を偲んで詠んだ詩歌が刻まれた碑が建っている。

この伊予石で造られた碑は、佐佐木信綱の歌碑で、昭和31年9月に建てられたものである。

信綱本人の揮毫による碑文には、

宇た人の 国守巡り

見し日にも

山きよらに 海

志つかなりけむ

和倉にて 信綱

と刻まれている。

この歌は、昭和4年5月頃、信綱が和倉を来遊した際に詠んだものである。この他に四



首、和倉温泉にちなんだ歌を詠んでいる。

文学のまち和倉

偶然であろうか、弁天崎公園には、当時の俳句と短歌の両巨頭が、同じ人物を題材とし同じ地で詠んだ詩歌の碑が並び建っているのである。

この他にも、昭和4年5月泉鏡花が和倉温泉へ来て『山海評判記』を書いている。この本には当時の和倉温泉の情景が書かれている。また、古くは十辺舎一丸が著した『方言修行 金草鞋』の中にも記述がみられる。そのほか、多くの著名な作家がこの地を訪れている。

和倉温泉の魅力、高温で豊富な湯量を誇る良好な泉質と心温まるもてなしで、心身ともに和んだ後に見る景色は、文人をはじめ多くの人に筆を持たせているのであろう。和倉温泉は癒しとともに、ひそかに文学のまちでもある。

周辺マップ

